

大杉栄と生物学

片野修

大杉栄は 1885 年に生まれ、1923 年に関東大震災がおきたのちに憲兵隊に殺害された。38 年の生涯であったが、その活動は恐るべきほど広範で魅力的である。一般的には、大杉は社会活動家として知られている。社会主義者あるいは無政府主義者と呼ばれることが多いが、作家として小説を発表しており、生物学者としての側面をもっていた。その理由は、ダーウィンの『種の起源』やファーブルの『昆虫記』を翻訳出版しているからである。このほか、クロボトキンの『相互扶助論 進化の一要素』の翻訳を行っているが、これは当時の社会思想や進化論に大きな影響を与えた。

この頃の日本では、資本主義と軍国主義が政治や社会を支配しつつあった。その背景には、ダーウィンの進化論があり、弱肉強食や自然淘汰の思想が、国の経済力や軍事力を強化するうえで支柱となっていた。一方で、世界的にはマルクス史観が勢いをもち、資本主義は生産性が高まれば、いずれ社会主義や共産主義に発展するという見方もあった。資本主義や軍国主義への反発から、社会主義運動がおこったが、活動家は次々に捕らえられ、虐殺されるようになった。

大杉はフリーライターの立場で、書くことによって出版社から原稿料を受け取っていた。翻訳が多いのは、英語やフランス語に長けていたことに加えて、刑務所に入れられることが多く、そのたびに翻訳をしていたからである。当時の社会では、社会主義だけでなく、労働組合運動ですら取締りの対象となり、集会をすれば監視され、少しでも騒乱を起こせば検挙される状況にあった。

大杉の社会主義はしだいにアナキズムの思想を強めていく。この場合のアナキズムとは、国家などの権威や権力を否定し、個人の自由意志のもとに相互に助け合う社会をめざすものである。そこにはクロボトキンの影響が強く感じられ、資本主義や軍国主義もみとめなかった。同じ社会主義者でも、少数の精鋭による中央集権的な党組織による革命をめざすボルシェビキ派と大杉らのアナキスト派はしだいに対立するようになる。

大杉の「奴隷根性論」には次の記述があり、栗原康の『大杉栄伝』で紹介されている。

主人に喜ばれる、主人に盲従する、主人を崇拜する。これが全社会組織の暴力と恐怖とのうえに築かれた、原始時代からホンの近代にいたるまでの、ほとんど唯一の大道徳律であったのである。

そしてこの道徳律が人類の脳髓の中に、容易に消え去ることのできない、深い溝を穿ってしまった。服従を基礎とする今日のいっさいの道徳は、要するにこの奴隷根性のお名残りである。

主人を社長、教祖、教授などに置き換えてみると、現代社会でもあてはまる論説である。

このような道徳に縛られている個人が服従から飛び立って、真の自由人になることを大杉は求めた。これは、政府や政党や宗教による束縛も否定するものだった。

そんな中で、大杉は上海で開かれた社会主義者の集会に参加したり、フランスへ渡って当地のメーデーで演説したりするが、結局日本へ強制退去となる。ソ連ではレーニン率いるボルシェビキ派が権力をもち、世界各地でアナキスト派は弾圧されていく。

大杉が強い影響を受けたクロボトキンは、ダーウィンの進化論を受け入れながらも、それを利己主義や競争原理に還元してしまう科学的方法をみとめなかった（栗原, 2013）。生きとし生けるものの根底には相互扶助があり、それによって生物は生き残り、進化するのだと考えた。大杉は「動物界の相互扶助—生存競争についての一新説」という論文で、戦争や資本主義が生存競争の名のもとに是認されることを批判した。

ダーウィンが用いた生存競争という言葉の中には、個々の生物が食物を奪い合うような狭い意味の競争だけでなく、互いに助け合って環境や捕食者に対応するものも含まれていた。しかし、のちの学者たちはダーウィンの幅広い議論を「血に飢えた餓鬼共の寄り集まった修羅場」であるかのように理解し、それを人類社会にまで応用した点が問題である。このような見方をする点で、大杉の思想はクロボトキンと一致していたと言ってよいだろう。

現代の見方からすると、ダーウィンの生存競争に基づく進化論は、やがて DNA の発見によって補強されながら、現在も主流派をなしている。DNA に生じる突然変異が自然淘汰を経て進化をもたらすと考えるのである。これに対して、たとえば日本では今西綿司が反発し、「すみ分け論」や自然淘汰を通さない進化論を提唱したが、その根底はクロボトキンや大杉と通じている。今西は大杉が翻訳した著作を読んでいたと推測される。

進化論については、とくに大進化のメカニズムが解明されておらず、さまざまな論争が行われ、決着はついていない。一方、生物の世界について、競争だけでなく、共生や協調について多くの事例が報告されており、さらに捕食や寄生も重要である。種内の個体間関係については、種の維持のための行動という考えは社会生物学の台頭とともに否定されているが、個々の生物が生き抜くために、他個体とともに行動したり協調したりすることはふつうにみとめられている。競争か協調かという議論は、いまでは短絡すぎる。

大杉はアナキズムを考えるうえで個性を重視した。彼の「生物学から観た個性の完成」という論文を読むと、個体の独立性、異質性そして持続性について論じており、そこにはベルグソンやハクスリーの影響が認められる。この考えは、DNA が発見され、社会生物学が流行したのちでも、依然として生態学や社会学において有効である（片野, 1991）。

社会主義は現在、ロシアや中国に見られるように、強力な国家とそれを支える政党、そしてそのトップを占める政治家によって支配されている。それが人々の幸せになっているわけではなく、むしろ貧富の差と抑圧をもたらしている。資本主義がいずれ社会主義や共産主義に発展すると考えるマルクス史観は現在では支持されておらず、ボルシェビキ派を否定した大杉の見識は正しかった

一方で、アナキズムが発展したかと言えば、そうではなくて、行き詰ったと言わざるをえ

ない。その理由は、権力と言うものが国家や宗教だけでなく、いかなる人間集団にも発生し、ただ一人の個人によっても、もたらされるからである（本ホームページの「生物学的に権力を分類する」参照）。人と人が集まれば、そこに何らかの関係が生じ、力が発生する。どれほど仲がよくても、ちがう状況下では争いになるかもしれない。強く結びつく二人の関係が続くと、二人は他人やその集団と対立するかもしれない。個体権力が集団権力になっていくのである。

「自分たちのなかに権力をたてない」ことをスローガンにしたアナキズムは、権力に対抗するうえでは有効であっても、自分たちが権力を握ったとたんに支配的になる。相互扶助的な人々が多いほど、利己的な行動は利得を増し、魅力的になる。

アナキズムは戦後になって、学生運動の一部に受け継がれていったが、はじめは同志であった集団内にしだいにヒエラルキーが形成され、内ゲバや粛清につながることもあった。一方で、いずれの国家や企業も一部の支配層によって運営され、その地位をめぐる闘争している状態である。相互扶助があるとすれば、互いに大きな利害関係がないようなコミュニティの中だけであり、それもいつ裏切られるかわからない不安定なものである。詐欺、不正、嘘が蔓延する現代社会から見ると、そもそもヒトは利己的な生き物であり、それは進化を通して DNA に刻み付けられていると感じざるをえない。大杉自身も、他の社会主義者と反目したり、何人もの女性との軋轢の末に刺殺されそうになったりしており（瀬戸内, 2017）、争いや利己性と無縁ではなかった。

したがって、世界すべてが平和で相互に扶助し合うという理想は達成されないと考えるべきである。そうではなくて、利己的で嘘をつく人間でも、部分的には協力できることがあると信じて、少しでも、短期間でも、相互扶助が成し遂げられるように努力するのがよいと思う。その点では、利益を追求する組織は嘘と利己に満ち溢れているので、そこから離れて静かに暮らしたいと考える人があらわれるのは当然かもしれない。「自分たちのなかに権力をたてない」という大杉の理想は、他者による権力を受けないと読むこともでき、組織から離れて自営に取り組むのは一つの方法であろう。

相互扶助を目指さなくても、互いに深くつながらなくても、争いや対立が生まれないようにすることも必要であろう。そのためには、対立を生みそうな個人や集団内の芽を監視し、互いの叡智をもってその芽が肥大しないように努力するべきである。その基本として、人間はそもそも利己的だと認識することはどうしても欠かせない。

参考文献

- 片野修（1991）個性の生態学。京都大学学術出版会
ピョートル・クロボトキン（2017）増補修訂版 相互扶助論（大杉栄訳）同時代社
栗原康（2021）大杉栄伝—永遠のアナキズム。角川ソフィア文庫
大杉栄（2023）大杉栄セレクション。（栗原康編）平凡社

瀬戸内寂聴（2017）諧調は偽りなりー伊藤野枝と大杉栄 上下。岩波現代文庫